



立正大学仏教学部 社会人受講生の声

仏教学部の基幹科目である「法華経概論」(原慎定学部長担当)では、毎年15名ほどの社会人が熱心に聴講しています。今回はそのうち、科目等履修生として僧階講座の単位を取得中の稲田海聡さん、長瀬美咲さん、ならびに社会人オープン講座生の渡邊光さんから、1年間受講した感想をうかがいました。

社会の経験があつてこそ、仏教の奥深さを実感できる

私は20歳で乙種検定、30歳で信行道場を修了しました。42歳まで高校の数学の教師を勤め、師父の遷化とともに住職を拝命しました。仏教については表面的な知識しかもっておらず、また「乙種では、白に茶金は着られないよ」という先輩からのアドバイスが僧階講座を受けるきっかけとなりました。原先生の授業では、「経文に我が身を合わせる」という日蓮聖人の基本姿勢に感銘を受けました。たしかに私どもは、つい反対に「我が身に経文を合わせ」ようとしますが、それではご都合主義で、いいとこどりの信仰であつて、日蓮聖人が「謗法」として批判されたのは、そうした自分本位の恣意的な仏法受容をさしていることを学びました。仏教の勉強は独学では限界があります。大学では先生方の人格性を通して、教えの奥深さを学ぶことができるので、毎回の授業がとても楽しみです。

稲田海聡



長瀬美咲

学びを通して、ともに歩む仲間を見つける

私は海外の大学で国際コミュニケーションを学び、5年前に乙種検定を受けた後、信行道場を修了しました。昨年からは本格的に法務に携わるようになりましたが、法話をするための知識がないことを痛感したため、青年会の仲間に勧められて本年度から僧階講座を受講しはじめました。原先生の授業では勝呂信静先生の『ものがたり法華経』がテキストでした。それ自体は読みやすいのですが、法華経は表面的に読んだだけではわからない、深読みが必要であることを学びました。特に印象に残ったのは「魂の成長に限界はない」という話でした。また法華経には男女の区別を超えてみんなが平等であると説かれますが、ジェンダーの観点からも、同じ目的を持った仲間であるという意識が必要なのだと思います。奥深い教えを、私たちの日常の身近な話として、法話にどう落とし込むかを考えながら聴講しています。学びを通して、仏道をともに歩む仲間を見つけたいと思います。

檀信徒として、もっと信仰を深めたい

私は法学系の大学院を修了し、品川区の自営業ですが、山梨県の日蓮宗寺院の檀信徒として江戸時代から続く家系に育ちました。50歳を過ぎて前向きな生き方を求めるようになり、特に立正大学において、ブレない教学を正攻法で勉強したいという願いをもつに至りました。日蓮宗の所依の經典である法華経をどのように勉強したらよいのか、初めは手探りの状態でした。原先生には最初の授業で「法華経を学ぶ」と「法華経に学ぶ」という姿勢の違いを教えてくださいました。また薬草喩品の「現世安穩後生善処」というお経文が釈尊の願いであることを知り、私どもは常に向上心を持続させなければ、すぐに増上慢に陥ってしまうことも学びました。日々の生活においてブレない前向きな生き方を見定めていく上で、大切な契機をつかむことができたと思い、感謝しています。今後は大学院での聴講も視野に入れて、生涯学び続けることを目標に、さらに信仰を深めたいと思っています。

渡邊光

